

ビデオ通話の限定的な活用による中山間地域での キャリア教育の試み

塩田真吾*1・高瀬和也*2・酒井郷平*3・勝村明*1・和田翔太*4

Email: shiota.shingo@shizuoka.ac.jp

*1: 静岡大学教育学部

*2: 静岡大学大学院教育学研究科

*3: 東洋英和女学院大学国際社会学部

*4: 放送大学大学院

◎Key Words キャリア教育, 遠隔授業, ビデオ通話, 中山間地域, 小規模校

1. はじめに

近年, 学校教育においては, 子どもたちの“自分らしい生き方を実現する力”を育てるために, 小学校からのキャリア教育を推進する動きが高まっている。

小学校におけるキャリア教育として, 文部科学省答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)⁽¹⁾では, 「仕事をするものの意義と幅広い視点から職業の範囲を考えさせる指導」を重要な視点として挙げている。さらに, 同答申は「学校外の教育資源である地域・社会と協力していかなければ, 効果的な指導を行うことは困難である」と指摘している。つまり, 学校は外部機関と連携しながら, 子どもたちが様々な地域や社会の大人と実際にふれあえるようなキャリア教育を行っていくことで, より意義を見出しやすくなると考えることができる。

一方, 中山間地域の小規模校では, 都市部の学校と比較して, 多様な大人にふれあう機会が少なく, 子どもたちの職業観・勤労観が広がりにくいという課題がある。

地域の中だけで職業観・勤労観が広がりにくいのであれば, 様々な企業で働く社会人を外部講師として学校へ招き, キャリア教育を行えばよいのではないかということも考えられる。しかし, 中山間地域の小規模校は, 市街地から距離があり, 公共交通機関の路線からも離れていることも多いため, アクセスに相当の時間がかかってしまうこともある。そのため, 企業側の負担や社会貢献活動としての費用対効果を考えると, このような出張授業を学校側からも依頼したとしても実現が難しいことが考えられる。

そこで本研究では, タブレット端末 (iPad) でのビデオ通話を活用し, 多様な職業人 (外部講師) の協力を得ることで, 中山間地域の小規模校における子どもたちの職業観・勤労観の育成を試みた。

2. ビデオ通話の検討

これまでも学校教育におけるテレビ会議システムやビデオ通話を用いた研究は行われている。例えば, 学校間交流⁽²⁾や国際交流⁽³⁾などでの研究は多い。しかし, キャリア教育においては, 職業体験や直接会って話を聞くなどの活動が中心であったため, テレビ会議システムやビデオ通話を用いた研究は多くはない。

また, 従来, テレビ会議システムと言うと, 高価なカメラや安定した高速通信, 専用のソフトウェアなどが必要であり, 気軽に利用するためには敷居が高かった。

そこで本研究では, タブレットで利用できるアプリケーション「LINE」のビデオ通話機能を使用した。「LINE」は, 世界で4億人以上のユーザー数をもち, 日本でも5千万人以上が使用しているコミュニケーションアプリである。LINEの画面を, iPadを通じて大型テレビに映し出すことで, 専用のカメラやソフトをインストールする必要がなく, 遠く離れた場所同士でも, 気軽にビデオ通話でコミュニケーションを行うことが可能となる。こうしたビデオ通話を用いることで, 企業側もわざわざ学校に出張する必要がなくなり, 本来の業務に支障が出にくい。また, 学校側も, 企業側に過度な負担をかけないので, 授業協力の依頼をしやすい。

さらに, 活用時間についても, 授業のすべてにビデオ通話を用いるのではなく, あえてビデオ通話の活用を限定的にすることで, 企業側の負担の軽減を図った。限定的に使用するために, 授業のなかで, 教員が担当する部分と企業の外部講師が担当する部分を明確に分担し, 外部講師は, ①仕事内容の紹介, ②子どもたちの発表にコメントを行う, ③質疑応答という役割に限定した。

3. ビデオ通話を用いた中山間地域でのキャリア教育の実践

本研究では, 静岡県の中山間地域の小・中学校で, ビデオ通話を用いたキャリア教育の授業を実施した。小・中学校では, それぞれのテーマによって協力した企業は違うが, 基本的な授業の流れは同一である。なお, 協力した企業は, すべて東京の企業であり, 外部講師は東京のオフィスでビデオ通話を行っている。実施概要をTable. 1, 授業の流れをTable. 2, 授業の様子をFig. 1に示す。

Table. 1 授業実施の概要

授業対象	静岡県内小学校2校 5・6年生 計17名	静岡県内中学校1校 1年生9名
授業時間	45分×2コマ	50分×2コマ
授業体制	教員と筆者らのチーム・ティーチング	

Table.2 授業の流れ

時間	授業内容
10分	1. 導入 ・授業のねらいと講師の紹介を行う。
20分	2. プロフェッショナルから学ぼう ・ビデオ通話で、講師から仕事の内容ややりがいについての話を聞く。
15分 (20分)	3. 課題を考えよう ・講師が提示した課題について、グループごとにアイデアを考える。
10分	1. 発表練習 ・グループごとに、発表の練習を行う。
15分	2. アイデアの発表 ・ビデオ通話で、グループごとに、プロフェッショナルに向けてアイデアを発表する。
15分 (20分)	3. プロフェッショナルからコメント
5分	4. 質疑応答 ・プロフェッショナルの仕事についての質問

太線は1コマ目と2コマ目の区切り
()内は中学校での時間配分



Fig.1 授業の様子

4. 実践の評価

本研究の実践では、ビデオ電話を用いたキャリア教育の授業の実施前と実施後とで、児童・生徒の意識面にどのような変容があったかを調査するべく、事前・事後アンケートを実施した。質問項目は「あなたは、『働くこと』と聞いて、どのようなことをイメージしますか?」とし、児童・生徒の回答を職種、お金、社会、家族、人間関係、将来・夢・資格、AI・ICT・ロボット、ポジティブイメージ、ネガティブイメージ、その他に分類した。

今回は、中学校での実践についてのみを示すこととし、生徒のアンケート回答例を Fig.2 に、アンケートの集計結果を Fig.3 に示す。

まずは、事前・事後アンケートの結果について考察を行う。各分類別の回答数を比較していくと、社会に関する回答数は4から8へ、将来・夢・資格に関する回答数は1から5へ増加した。これらの結果より、働くことを「社会」や「将来」とつなげて考える意識が向上したと考えられる。

さらに、働くことに対するポジティブイメージに関する回答数が4から15へ増加し、ネガティブイメージは9から5へ減少した。つまり、授業を通して社会で実際に働いている人と接することにより、生徒の「仕事」や「職業」に対するイメージが変容したことが推察できる。



Fig.2 生徒のアンケート回答例

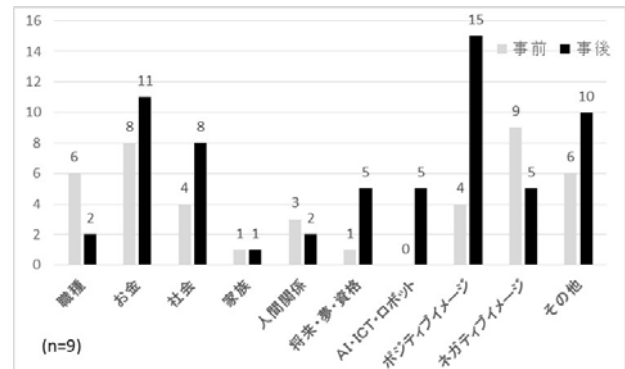


Fig.3 アンケートの集計結果

また、回答全体の語数を見ていくと、事前は42語(1人あたりの平均は約4.7語)であったのに対し、事後は64語(1人あたりの平均は約7.1語)に増加していた。この結果より、「働くこと」と聞いて関連づけられるイメージが増加したことが伺える。これらのことから、本実践が、子どもたちの職業観・勤労観の広がりや寄与できたと考えられる。

今後、実施校の数を増やして実践を行うとともに、小規模校という性質上、量的な分析が難しいことから、質的な分析を精緻に行っていく予定である。

参考文献

- (1) 文部科学省 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (最終アクセス:2018年6月15日)
- (2) 竹生秀之・足助武彦 (2017) 「伊那における遠隔授業」, 日本デジタル教科書学会発表予稿集 6(0), pp.63-64
- (3) 片野雅弘・八代一浩・安藤淑子・鈴木新一・水越一貴 (2012) 「多様なコミュニケーション手法を用いた遠隔日本語授業システムの開発」情報処理学会研究報告コンピュータと教育 (CE) 2012-CE-114(10), pp.1-7
- (4) 山本朋弘・新地辰朗・清水康敬 (2016) 「小学校遠隔授業の活性化を図る授業設計の一考察」, 日本教育工学会研究報告集 16-2, pp.179-186